

# 初めての都市生活 森下 恵介（奈良市埋蔵文化財調査センター所長）

私たち日本人は、奈良に都があつた奈良時代に初めて本格的な都市生活を経験しました。法律、行政制度から俸給生活、物価高、食事作法に至るまで奈良時代に始まつたことは実際に多く、その多くは現代社会にもつながつて



平城京跡から出土する巨材を割りぬいた井戸枠

奈良時代庭園が  
教えてくれること

人々がつくり出してしまつたものです。日本人は奈良時代以降、自然景観を改變するような力をもつてしまひました。「白砂青松」とかつてほめたたえられた瀬戸内地方の海岸の景観は古代以来、この地方で行われた製塩のための燃料として木材が伐採されて出来上がつたとされ、山陰海岸の砂丘もまた、古代以来の中国山地での砂鉄採取が生み出した景観と考えられています。私たちが「日本の自然」だと思つてゐる景観には、「湖南アルプス」をはじめとして人が行った自然改变の結果、できた人為的な景観が多くあることを忘れてはなりません。



「湖南アルプス」の景観

現在も奈良に残る奈良時代建築が雄大で力強いというのもこうした森林資源の浪費ともいえる過剰利用がその背景にあつたたゞ、一方、平安時代の建築が木割りが細く、纖細、優美であるというのも、平安時代には利用可能な森林資源が、近畿地方ですでに枯渇していたという事も要因のひとつなのでしょう。

明治以後、山上山一帯では、淀川水系の河川氾濫防止のための治水事業として植林や砂防ダムの建設が続けられており、私たちは奈良時代の自然破壊の「つけ」を今も払いつづけています。人間の自然利用が自然回復力の限度を越えると、一三〇〇年たつても、その回復は困難なことを教えてくれています。

紀の後半に営まれた藤原宮の造営により、木々の伐採が始まりました。『万葉集』卷一には「藤原宮役民の作る歌」として「石走る淡海の国の衣手の山上山の真木さく檜の嬬手を」もののふの八十氏河に「玉藻なす浮かべ流れれ」とあり、造営資材として田上山の檜材が勢田川、宇治川、木津川の水運を利用して、遠く藤原宮に運ばれたことがわかります。大和には吉野山地といふ山々があり、飛鳥地方にも近いのですが、山々が古く、飛鳥地方にも近いのですが、水運が利用できいため、吉野の山林は、古代には使うことができませんでした。

田上山一帯の森林は、奈良時代にもひき続き、平城京や大寺院建立の用材として、さらに盛んに伐採されました。正倉院文書

います。咲く花のにおうが如くと贊美された天平文化だけに目を奪われがちな奈良時代ですが、平城京という古代都市の出現は人と自然との関わりにも大きな影響を与えており、その影響は現在も続いています。

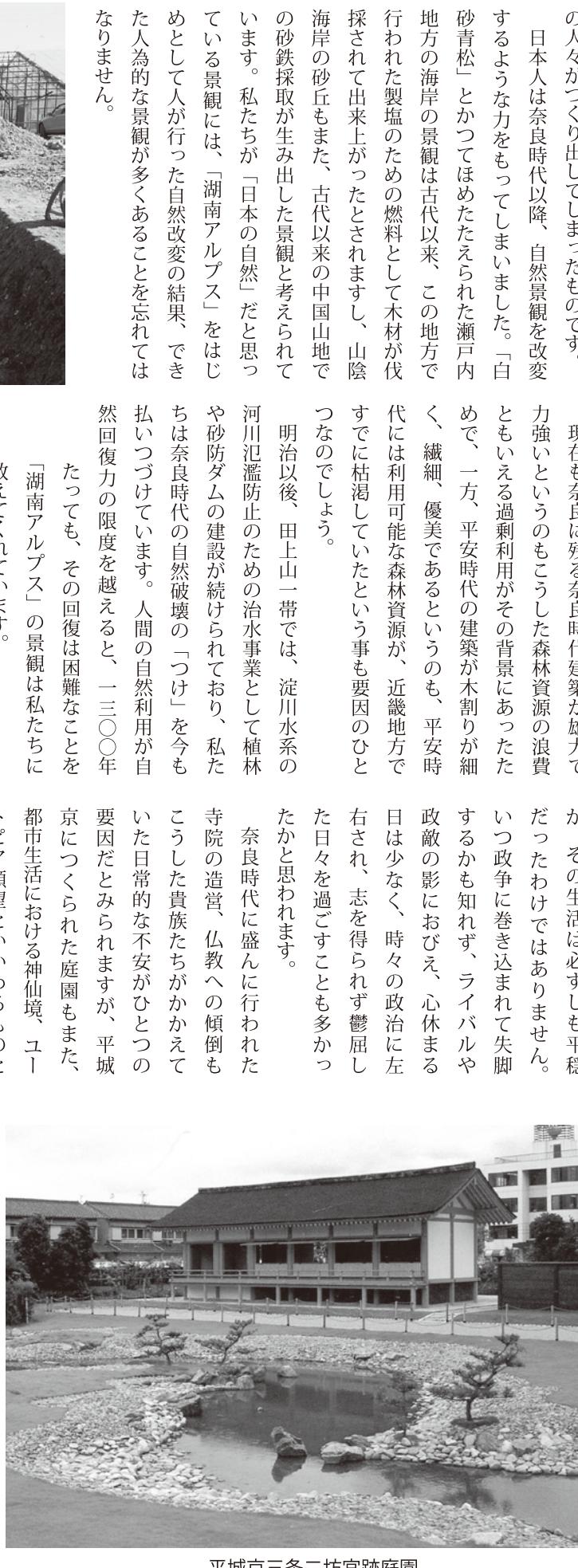
います。咲く花のにおうが如くと贊美された天平文化だけに目を奪われがちな奈良時代ですが、平城京という古代都市の出現は人と自然との関わりにも大きな影響を与えており、その影響は現在も続いています。

に記される「田上山作所」というのが、この作業拠点で、京都府の「木津」の地名も木材の港ということからついた地名です。平城宮の造営だけでも三〇万m<sup>3</sup>という膨大な木材を使用したと推定されており、これに東大寺などの大寺院、都のなかの貴族の邸宅から庶民の住宅まで加えると都の造営に必要とした木材の量は想像を絶します。

平城京の発掘調査でみつかる当時の建物遺構の大部分は掘立柱建物です。柱が腐朽するため、たびたびの建て替えが必要です。縦引きノコギリや台ガンナなどはありませんから板材は巨材を割つて作つて走る淡海の国の衣手の山上山の真木さく檜の嬬手を。もののふの八十氏河に「玉藻なす浮かべ流れれ」とあり、造営資材として田上山の檜材が勢田川、宇治川、木津川の水運を利用して、遠く藤原宮に運ばれたことがわかります。大和には吉野山地といふ山々があり、飛鳥地方にも近いのですが、木材を消費した時代だということが実感されます。

こうした日本の古代国家が行つた都や寺院の大規模造営による森林資源の過剰伐採の結果、山の表土が流されて出来た姿が「湖南アルプス」なのです。その特異な景観は土することもあり、奈良時代はふんだんに木材を消費した時代だということが実感されます。

こうした日本の古代国家が行つた都や寺院の大規模造営による森林資源の過剰伐採の結果、山の表土が流されて出来た姿が「湖南アルプス」なのです。その特異な景観は土することもあり、奈良時代はふんだんに木材を消費した時代だということが実感されます。



平城京三条二坊宮跡庭園

平城京に暮らした人々の人口は諸説ありますが、現在では約十万人程度と考えられています。平城宮に勤務し、俸給生活で暮らす役人とその家族がほとんどで、政治の中核を握る五位以上の貴族となると一二〇〇人五〇人ぐらいだとされます。平城京では一町（約一四〇〇〇m<sup>2</sup>）以上

の広大な宅地に暮らす貴族たちです

ます。自然に恵まれた中で生活している時代には必要なかつたのでしょうか、奈良時代には理想空間として、心休まる自然の景観を模した庭園を必要としたのです。このことは、聖武天皇が、自然の山河の清らかに理想境を求めて吉野への行幸、恭仁宮や紫香楽宮の造営を行つたこととも、たぶん無関係ではないでしょう。

平城京の庭園遺跡は奈良時代という時代の貴族たちは、都市平城京での暮らしの代の飛鳥時代の庭園が、直線的な平面プランをもち、須弥山石などの噴水施設をもつて、この庭園は、海浜や河岸など自然地形を景石や水で表現している点が大きく異なり、その後の日本庭園の原点は、すでに奈良時代に確立していることが、よくわかりでもあつたことをものがたつています。